

## 報告2 「大学生の授業外学習の実態と成長指標としての授業外学習」

溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

京都大学の溝上です。よろしくお願いします。「大学生の授業外学習の実態と成長指標としての授業外学習」というタイトルでご報告申し上げます。私の役割は森先生の基調報告を受けて、授業外学習に関する学生の実態をデータを基に皆さまに議論の資料としてお伝えすることです。

(以下スライド併用)

学習時間が長ければいいというものではないのですが、ただ、まだまだ日本の学生の授業外学習時間というのは本当に少ないわけです。今日はそれを何回もいろいろな角度からお伝えするのが私の仕事です。やる学生とやらない学生がはっきり分かってきますので、授業外時間、いわゆる量的な指標は質的なインパクトをかなり持っています。そういう意味で、学習の時間が学生の成長指標になるという現況をご報告申し上げます。これが二つ目です。

ただ、これからいろいろ制度が整備され、各大学の取り組みが進んでいくと思います。そうなってくると、多くの学生が授業外学習を当たり前のようにするようになると思います。そうなると、時間ではなかなか成長指標になってこないと思いますので、今度は取り組みの中身、プロセスやパフォーマンス、そんなところが指標になるかなと、何段階かに分けて先を見据えながら取り組んでいます。しかし、まだまだ今の段階では時間が成長指標になるという段階ですので、それをご報告します。

単位制度は必ずしも、後で事例報告をしていただく、例えばコースシステムの週の複数回授業、あるいはオーナーズ・プログラムといったところを含み込むものではありません。ただ、松下が申しあげましたように、現状の単位制度の中で学生の成長につながるように取り組んでいくときに、どうしても他のさまざまな枠組みや制度と一緒にカップリングしながらやっていくことが必要になってくるわけです。そういったところも含み込みながらお話しさせていただきます。(スライド No.2 参照)

まず、国際比較です。(スライド No.3 参照)

今日は単位制度の基本に戻って私たちの現場を考えるという企画ですので、まず単位制度の発祥の地であるアメリカの状況を、私も専門ではないのですけれども、分かっている範囲でご説明したいと思います。

この手のデータはいっぱいあるのですけれども、私たちが知りたいところに関するデータは非常に少なく、しかも昔はどうだったのかとかなって来ると、日本も同じなのですが、本当にデータが全然ないのですね。そういう中で、限られたものでも、私たちが使っているデータが一つあります。これは Babcock というサンタバーバラの経済学部の Working Papers から出てきている最近の資料です。アメリカでも、先ほどの森さんの話とはまた別の意味で、学習時間というものに対しての危機感があるようです。私たちは、アメリカの大学生といえばかなり勉強しているとイメージするのですけれども、アメリカの資料から見ると学習時間が激減しており、それが危機感となっているわけです。

幾つか資料を重ねて表を作っているのですけれども、A はパートタイムを含めたちょっとぼんやりしたもので、B はフルタイムです。B を見ますと、Academic Time というのが、いわゆる授業と授業外学習時間を含めた総時間になります。アメリカの場合は授業外学習を前に持ってきて Study Time という言い方をします。例えば、ちょっと古いのですが、1928 年と 2003 年だけを見ても 21 時間から 12 時間に減っています。また、A の方では 65 年が出てきますから、戦後を見ると、戦後でも同じように減っています。この論文では 1928 年と 2003 年の比較になりますので、ここに黄色を付けていますけれども、とにかく激減しています。

授業時間も一緒に減っています。日本でしたら授業時間はとても長くて、授業外学習時間だけが問題になるのです

が、アメリカの場合は両方一緒に減っていったらしくて、なかなか厳しい状況にあるようで、Bを見ますと、大体12時間の授業時間です。1週間の時間数ですから、日本的に3時間(3コマ)が一つのコースだと考えると、先ほど森さんからもご説明がありましたけれども、4コマ、4コースぐらい取っているということですから、私たちが聞いている現状に即しているのではないかなと思います。プラス12時間の平均した授業外時間です。授業外学習時間、あるいは授業学習時間数も非常に減ってきているという結果です。(スライドNo.4参照)

こちらは、Not Workingがフルタイム学生に相当するものだと思います。男性、女性、それから、White、Asian、Blackといろいろ分けていっても、61年と2003年を比較したときに非常に学習時間数が減っているということです。今日は授業外学習時間が一つテーマになっていますので、これは授業外学習に限定してお見せしています。(スライドNo.5参照)

学部(コース)に従って分けて見ても一緒です。どれを取っても激減しています。Babcockに言わせると、男女、あるいは人種、学部、コース等々で違いが出てくるという話ではないということで、非常に時代の変化をもって学習時間数が減っているというところに結論が持っていわれています。(スライドNo.6参照)

2月に私たちのセンターでカナダからJames Côté先生をお招きして国際シンポジウムを行いました。Côté先生をお招きしたときのテーマはアイデンティティ・キャピタルでした。ヒューマン・キャピタル、ソーシャル・キャピタル等々がいろいろこれまで議論されてきたわけですが、学生が自分を形成していくことが将来の資本になるということを前提とした現代社会、あるいは教育論ということテーマにして国際シンポジウムを行いました。

Côté先生は高等教育の分野でも有名な方で、最近も『Lowering Higher Education』という本を出されました。これはまだ出て1カ月ぐらいの本です。もしご関心のある方はぜひ読んでくださればと思います。その本の中に、カナダとアメリカを比べた学生のEngagement(学習に対するかかわり、従事)、これはNSSEで使われているEngagementという言葉ですが、それを使ってCote先生も議論されています。Engagedをしているのがいい学生、Disengaged、つまりEngageしていないのが駄目な学生ということで、中間をPartiallyとしています。図は非常に単純で、いろいろなサイズ(大きい、中間、小さい)で、アメリカ、カナダを六つ並べています。ただ、規模に関係なく、またアメリカ、カナダに関係なく、Engagedの学生は非常に少ないという結果を出されています。Côté先生は授業外学習時間をEngagementの指標に持ってきていますが、問題はどの時間をEngagementの指標にしているのかということです。それは25時間です。10時間以下だとDisengagedということになり、これが50%ぐらいです。Engagementの学生が10~20%です。

日本で同じようにやったら、多分Disengagedが90%ぐらいまで行きます。システムが全然違いますけれども、日本の学生の特徴は、こういうところと比較していくとかなりクリアになってきます。(スライドNo.7参照)

皆さんご存じのように、山田礼子先生をはじめ関係者が米国とのいろいろな比較、それから日本でのIRの中での大学生調査を大規模にされています。アメリカのHERIの研究所のCSS(College Senior Survey)と比較できる形で日本版を作成し、その調査を日本でされてきています。比較がある程度前提となって進められたプロジェクトで、CSSと日本人を取った2年分のデータが比較されています。これはConference Paperで、断っていろいろお願いして頂いてきた図です。後ほど出されるそうなので、またそこで私たちは見ていきたいと思いますが、これによりますと、右二つが1週間に16時間以上の授業学習時間です。薄い青のところは16~20時間、ピンクのところは20時間以上、授業に参加しているというカテゴリです。ここの合算を見ていけばいいと思いますが、この合算値が多ければ、いわゆる授業に参加している学習時間が長いということです。日本は2005年から2007年に授業時間が増えている形になっています。増えている、増えていないという話をするにしても、非常に大きな割合を持っています。アメリカの方ではこういう感じですので、やはり日本の学生の授業に参加する時間数が非常に長いことがこれから分かります。

後で私の電通育英会と京都大学でやっている調査の結果もお見せしますが、そこでもやはり授業に参加する時間数は長いですし、2007年と2010年11月に2回目の大きな調査をしましたが、そこでも授業学習の時間数は長

くなっています。これが全国の一般的な傾向として理解できるものかは、まだ慎重に考えていかないといけませんけれども、授業学習への参加時間数は全国で見たら長くなっているなということを思ったりしています。山田先生のものを見ても長くなっていますので、授業に参加する時間数は年々延びているのかなと思います。授業外学習時間数は減っていますので、そういう傾向が見て取れると、今のところは言えるかもしれません。(スライド No.8 参照)

授業外学習時間です。ここが日本は短いわけです。先ほどは薄い青のところでも切りましたが、赤いラインは5時間のラインです。日本の学生は1日1時間学習して、土・日曜日は外して、週5日学習したら5時間です。これをクリアする、しないというところで議論していたのでは、単位制度の観点からすると全く話にならないのです。でも、その5時間で大体何%になってくるかを見てくだされば、日本の学生の状況、あるいはその基準で見たときの米国の学生の状況がお分かりになるのではないかと思います。日本では5時間のところで切ると、こういう感じです。これは先ほどの山田先生のデータです。2005年でしたら、大体5~6割ぐらい、そして2007年が7割ぐらいという感じになっています。これが日本人のデータです。アメリカの方ではこういう感じです。これより右の方は当然6時間以上です。これが米国との授業外学習時間比較です。(スライド No.9 参照)

二つ目に、私の方のデータを使って、もう一度同じような形で別のデータから学生の授業学習あるいは授業外学習時間の実態を踏まえて、授業学習と授業外学習の組み合わせを見ていくと、それが学生の成長指標としてなってくるものですから、その辺のお話を後半します。(スライド No.10 参照)

京都大学の私たちのセンターと電通育英会との共催でさまざまな大学生のデータを取っています。ここでお示しするのは、全国データの中でも結構大規模にいろいろ尋ねているものです。今まで私は、特に2007年の調査の結果をいろいろなところでご報告してきましたけれども、3年おきに同じ調査をずっと取っていかうという話で進めており、2010年11月の結果が出てきていますので、今日はその二つを併せてご紹介します。1年生と3年生をサンプル対象として1000人ずつぐらいを取っていくというやり方で、全国のさまざまな県、あるいは大学のレベル、あるいは分野といったところも入ってくるようなデータとなっています。このデータを使って、前半にお示した結果と同じものがどうなっているのかということを見ていきたいと思います。(スライド No.11 参照)

まず一つは、授業外学習です。2007年値で見えていきますと、先ほどの5時間というものが一つの基準だという言い方をしました。ここで見ていくと70%です。1年生も3年生もそんなに変わりません。個人の中で変わっているということはあるでしょうけれども、全体としては5時間以下が70%です。(スライド No.12 参照)

先ほども言いましたように解釈には慎重を要しますが、2010年になってくると5時間以下の学生の割合は増えており、80%に達しているという状況です。(スライド No.13 参照)

自主学習に関して、アメリカの方の調査ではClass hoursとStudy hoursの2本柱で尋ねています。Study hoursが日本で言う授業外学習に相当する部分ですけれども、まだまだこんな状況です。授業に関連して、例えば予習、復習、レポート、課題など、そういったものに費やす授業外の学習時間と、自分で授業に関係なくいろいろ勉強する自主学習、日本は特に自主的にする学習、自学自習ということを戦前から、何も京都大学にかかわらず推奨してきた流れがありますので、そういったところから分けて聞いています。先ほどお見せした前段のものは、授業に関連して行う授業外学習です。自主学習の授業に関連しない学習の時間数はどうなのか。これはもちろん多くありません。先ほどの授業外学習時間からするとずっと時間数は減りますけれども、一応見てみると、80%以上が5時間以下の自主学習です。それでも全くしていないわけではないのかなとも思います。(スライド No.14 参照)

2010年では、何の自主学習をしているのかということをお見せしていただくと結構聞きました。今日はお見せしていませんけれども、私たちがよく知っているような資格の勉強や語学の勉強などが多いです。読書やいろいろな調べものな

ども、ないわけではありませんけれども極めて少ない状況です。一般的には資格、語学という感じです。2010年になっても、この辺は一緒で、やはり80%以上が5時間以下の自主学習です。2007年と2010年を比べてみたときに、授業学習時間の方が伸びていて、授業外学習時間が減っているという傾向はデータの上では認められます。先ほどの山田先生のデータも含めると、そんな感じが一般化しているのかなといった気配もありますけれども、こういったことぐらいでしょうか。(スライドNo.15参照)

授業外学習時間に関して、文系、理系、学際系、それから医療系などを比べてみますと、こんな感じになっています。授業外学習の時間を先ほどの5時間のラインで同じように切っています。右側が多ければ、よくやっているということです。理系や医療系などはちょっと多いですけども、文系は少ないでしょうか。授業外学習が弱く、時間が短いのは文科系だと言うことができるかもしれません。(スライドNo.16参照)

自主学習になってくると、医療系、理科系も弱くなってきます。ちょっと参考になりませんね。(スライドNo.17参照)

授業外学習の時間数を見ていくことは、一方ではとても大事な議論だと私は思っていますので、非常に単純ですけども、こういう実態を確認していきたいと思います。学習を長い時間やればいいものではないとか、そういう議論をされる方が必ずいます。私もそのつどいろいろ考えているのですけれども、まだ質を考えていくほどの量ではありません。やはりどういう形でもいいので、現場の取り組みとしては、学生に授業外学習の時間数が伸びていくようにあれやこれやとやっていくことがまずは大事ではないかと考えています。そういうものがある程度形になってくれば、時間ではないでしょうみたいな話をしていきたいと思っていますが、まずはやはり時間数を伸ばしたいかなという感じで考えています。

ここから示すのは、授業の学習時間と授業外学習時間、あるいは自主学習の時間のバランスです。私たちはこのようにばらばらに見ているわけですけども、学生の中では学習というものを全体としていろいろ有機的にシステム化しながら、あるいは学習システムとして営んでいたりしますので、その辺を考えて、この組み合わせをいろいろ作ってみようこの図を作りました。ここはクラスター分析をしており、時間の関係で詳細は省きますけれども、大きく四つのグループに分かれます。

タイプ1は、授業を中心として1週間の学習を構成している学生群です。この四つのタイプの中では半数を占める一番多い学生です。ですから、日本の学生はとにかく授業が中心だということはこういう分析から明らかになります。タイプ2は、1週間の学習時間数がそもそも全然足りない、授業も来ていないという学生で、全国のこういうデータで見ると15%弱でしょうか。タイプ3は、授業にも出ているし、授業外学習時間も先ほどの5時間のラインは大きくクリアしている、それから自主学習もしているという非常に意欲的な学生群で、全国でいえば20%ぐらいです。それから、大学から授業などで与えられる学習時間はないのですけれども、自主学習はしているというタイプ4です。こういう感じの学生グループを作りました。まず私たちが理解すべき点は、こういう四つのタイプがあるということ、そしてデータで見て全国的に一番多いのはタイプ1の授業を中心とする学生群であること、これが日本の特徴だということです。(スライドNo.18参照)

次に、この四つのグループの中でどれがある観点でいいのか、悪いのかということをお私達は知りたいと思いますので、この四つのグループを独立変数として学習時間や学習意欲を見ていきたいと思えます。

ちなみに分野別を先に見ておきます。授業中心の学生で多いのは理系と医療系です。黄緑のところ、いろいろやっているというのが多いのは医療系です。割合からして見たらそんなに違わないかもしれませんが、文系の学生には統計的に出てきません。出てくるのは自主学習をやっている、あるいは学習時間がそもそも全然足りないという学生です。文科系はこういう特徴を持っています。いろいろ課せられていく医療系、自分でやるしかないのやっている文科系という構図が見えてくるかもしれません。授業中心の学生は、もちろん医療系、理科系の中にも結構います。(スライドNo.19参照)

4群の特徴を見ていく分析を最後にお見せします。これは単項目ですので簡単な分析ですが、学習意欲に関して見ますと、タイプ3と4の授業学習と授業外学習、自主学習をバランス良くやっている学生群は得点が高くなってきます。授業だけで1週間を多く過ごしている学生は、この後に示す分析でもそうですけれども、点数がどれも軒並み低くなっています。やはり授業というのは与えられるものですから、与えられる勉強だけではなかなか意欲や、あるいは後々のいろいろなキャリアといったものにつながっていかないのかなと思ったりもします。(スライド No.20 参照)

これは自己評定ですが、知識・技能・態度のいろいろな獲得です。授業・授業外を通して、コミュニケーション能力や思考力、課題遂行力といったものをどれくらい身に付けているかという評定をしてもらい、それを1項目ずつ見ているとちょっと大変なので、大ざっぱに因子分析をしてまとめた三つの得点です。授業の中で身に付けている知識・技能・態度全般の得点と、対人関係の関係性や課題遂行力を授業外で身に付けているという得点、それから、授業外で専門的な知識、技能・態度を身に付けているという得点です。

そういった感じの得点を、先ほどの四つの授業と授業外学習の時間数の組み合わせで作ったタイプを基に見ていきますと、まずタイプ1はどれも一番低いです。学生自身の自己評定ということですので、実際にどれくらいのコミュニケーション能力が身に付いているか、思考力があるかなどは分かりません。ただ、自己評定においても、やはり授業中心で1週間を過ごしている学生は、自分が授業・授業外でいろいろな知識や技能・態度などを身に付けていないと答えています。そして、バランス良くやっている学生群は高い得点を示します。(スライド No.21 参照)

もう一つ、やはり大学教育ですから学生にしっかり勉強させていくということをいつも考えていますけれども、学習の内容だけで学生を学習に動機づけてのは本当に難しい、教室の中だけの面白さや楽しさということだけではなかなか学生を学習に動機づけていくことは難しいと思います。もちろん教員一人一人としてはそういうことをしっかりやっていくということですし、私も一教員としてはそういうことを常々していますけれども、他方で、データから見てもそうですし、実際にいろいろな学生にインタビューしたり話を聞いたりしても、学習を動機づける背後に学生自身の成長意欲、あるいは将来に対する見通し、キャリア意識といったものがかなり絡んでいるということがあります。

そういったところの観点から、学習をいろいろ支援していくと同時に、他方で大学教育全般の学習に絡んでくるさまざまなものを支援していくホリスティックな大学教育支援ということが必要かと考えています。何から手を付けていくか、いろいろあるのですが、そういったときに効いてくるものをずっと探してきたこれまでの研究があります。そういうものの中で一つ見いだしてきた変数が、「二つのライフ」と私が呼んでいるものです。この「二つのライフ」を実現している学生は勉強もしますし、対人関係も豊かだし、あるいは知識・技能・態度の獲得といった程度も高いです。今日は示しませんけれども、就活の結果、第1志望に内定を取る割合も、この「二つのライフ」を実現している学生群が高いということが昨年末の追跡調査で出てきましたので、かなり基盤的な変数になっていくと私は見て、紹介しています。(スライド No.22 参照)

これは一体何なのかと思ったら、将来の見通しです。キャリアデザインのことです。将来の見通しは、多くの学生が非常に漠然としたレベルからしっかりしたレベルまで含めて持っているのですが、それではなかなか学生は分かれてきません。他方で、将来こんなふうになりたい、こんな仕事がいいと言っているだけではなくて、そういう将来に向けて日々努力する、いろいろな目標や課題を立てて将来と日常をつなげていくということを両方やっていることを、「二つのライフ」の実現と言っています。future life と daily life です。

それを組み合わせていって、見通しがあって何を日々やったらいいか理解していて実行している群、それから、見通しがあって何をやったらいいか分かっているけれどもやれていない不実行の群、見通しがあるだけで、何をやったらいいか分からない群、見通しもない群という4群に分かれて、全体の分布を見るとこういう感じになっているわけです。先ほど申し上げたように、理解実行群の学業、あるいは技能・態度等の獲得、汎用的技能などを含めて、そういうものに対するインパクトは非常に大きいです。こういうものと先ほどのタイプを重ねてみると、こういう感じに

なります。タイプ3が先ほどの授業学習、授業外学習、自主学習といろいろバランス良くやっていた学生です。自主学習をやっている学生は、やはり理解実行群に多く出てきます。それから、授業だけでしか勉強していないような学生、あるいは学習時間自体が少ない学生は見通しなしのところが多いという感じになっていまして、私たちが理解している実態とかなり整合性があるなという感じがしています。(スライド No.23 参照)

非常に簡単なものですが、これから3名の方々の事例を聞いていく大きな枠組みの話をするのが私の役目ということですので、そういう感じでお話をしました。

一つは、学生の授業・授業外学習時間の国際比較です。非常に単純な結果ですが、私たちはこういうのも含めて日本の状況を見ていく必要があると思います。米国・カナダの学習状況の悪化と、それに比べての日本の状況が一つです。

二つ目に、バランスのいい授業・授業外学習が学生の成長指標となる。現実問題としてあまりにも短い授業外学習時間ということは認識しておく必要がありますが、加えて、タイプ1の授業学習を中心とする学生は学習意欲・知識・技能の獲得、二つのライフはいずれにおいても非常に弱い、逆にバランスのいい学生は非常に成長意欲が高く、志向性も高いということです。こういうことが大きく言えるかと思えます。(スライド No.24 参照)

私の二つのライフや、学生の学びと成長にかかわる考え方を書いている本がありますので、ご関心のある方はどうぞご覧ください。(スライド No.25 参照)

それから、大学生研究フォーラムです。今日お話ししたような二つのライフをはじめとするようなキャリアと学業をつなげていく議論が非常に大事になってきていると私は思っています。そういったものを、電通育英会の方々と一緒にフォーラムを行い、いろいろ関係者と議論しています。今年は8月1日にここでこんな感じで行いますので、またご都合をつけてご参加くださればと思います。(スライド No.26 参照)

以上で私の報告を終わりたいと思います。どうもありがとうございました(拍手)。

(松下) 溝上さん、どうもありがとうございました。ただ今の報告に対して、簡単な質問だけでしたら受け付けたいと思いますが、どなたか、いかがでしょうか。

授業外の学習はよくひとくりにされるのですが、溝上さんの研究では、授業に即して課題などをこなす授業外学習と自主学習とを区別しています。その上で、授業外学習と自主学習の両方をやっているということが「二つのライフ」の上で重要だし、それがまた就活などで自分の志望に従って未来を切り開いていく力にもつながっていくという点を指摘したことが、非常にオリジナルなところではないかと思えます。

もしご質問が出なければ、これでいったん切らせていただきますけれども、質問票にぜひお書きになってください。今の時点で溝上さんと森さんに対して質問をお書きになっている方は、どうぞ係員の方にお渡しいただければと思います。

この後5分ほど休憩を取らせていただき、その後にまた3人の方にご報告をいただきます。その後の休憩は15分取るのですが、質問票を集めてその回答を考えるのにはあまり長くない時間です。できるだけご質問を集めてそのつどご報告された方のほうに回していきたいと思えますので、どうぞご協力をお願いします。それでは、2時40分に再開しますので、よろしくお願いたします。

—休憩—

(松下) 2時40分になりましたので、再開したいと思います。

これから3本のご報告をいただきます。現在の単位制度の下でさまざまな工夫がなされています。まず京都大学医学研究科の森本剛さんからご紹介いただくのはモジュール制ということです。森本さんは本学の医学部を修了されて、ハーバードの方で修士課程を修了され、病院勤務を経て医学研究科の教員になられ、現在は医学教育推進センターの

教員を務めておられます。それでは、よろしく申し上げます。

京都大学高等教育研究開発推進センター主催第17回大学教育研究フォーラム  
シンポジウム「単位制度から見る授業学習・カリキュラム」 2011.3.17 (木)

**大学生の授業外学習の実態と成長指標  
としての授業外学習**

**溝上 慎一**  
(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

http://smizok.net/  
E-mail smizok@hedu.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

1

**本日の話**

- 学生の授業・授業外学習時間の国際比較
- バランスのいい授業・授業外学習が学生の成長指標となる

**含み**

- 単位制度
- コースシステム(週複数回授業)
- オナーズ・プログラム

2

**本日の話**

- 学生の授業・授業外学習時間の国際比較
- バランスのいい授業・授業外学習が学生の成長指標となる

3

**米国の大学生の学習時間は減少傾向**

A. すべての学生

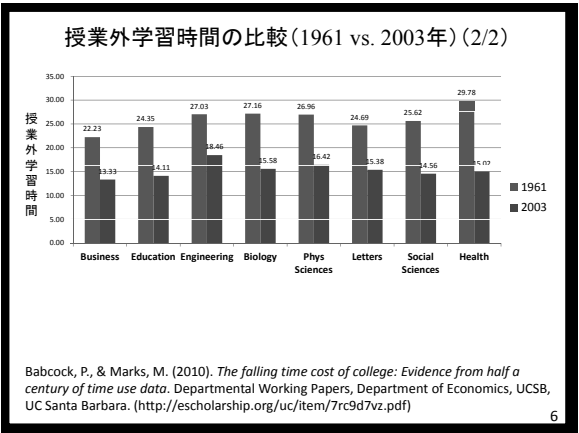
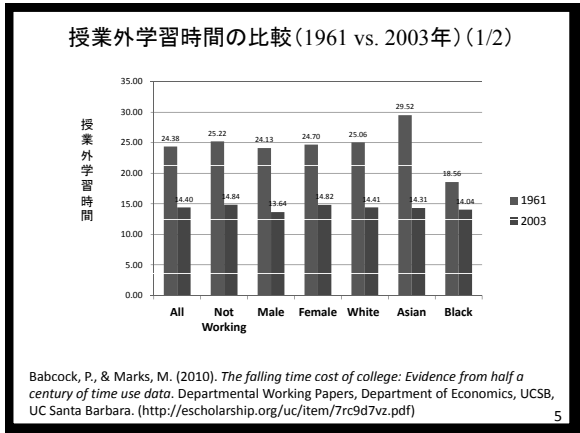
		1928	1928	1933	1965	1975	1985	2003
Academic Time	学習総時間	38.3	38.5	39.2	34.1	23.6	18.0	14.2
Study Time	授業外学習時間	-	21.0	-	18.2	11.1	8.9	7.2
Class Time	授業学習時間	-	17.5	-	15.9	12.5	9.2	7.0

B. 正規学生 (Full-time students) のみ

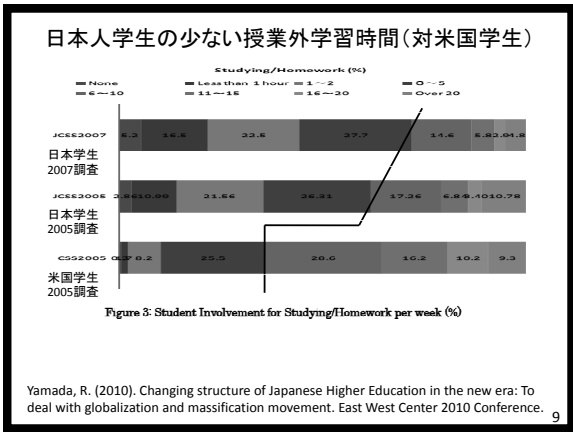
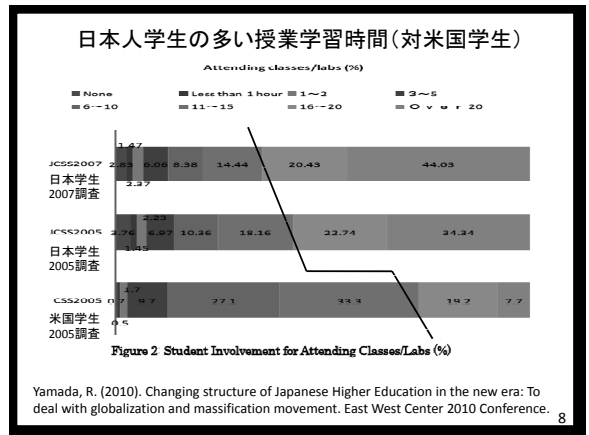
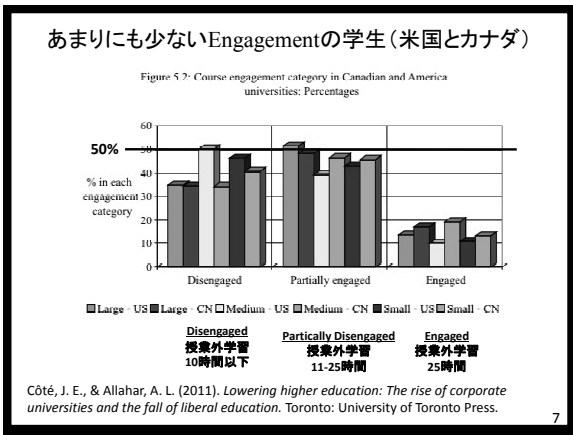
		1928	1928	1933	1965	1975	1985	2003
Academic Time	学習総時間	38.3	38.5	-	-	-	-	23.7
Study Time	授業外学習時間	-	21.0	-	-	-	-	12.1
Class Time	授業学習時間	-	17.5	-	-	-	-	11.6

Babcock, P., & Marks, M. (2010). *The falling time cost of college: Evidence from half a century of time use data*. Departmental Working Papers, Department of Economics, UCSB, UC Santa Barbara. (<http://escholarship.org/uc/item/7rc9d7vz.pdf>)

4







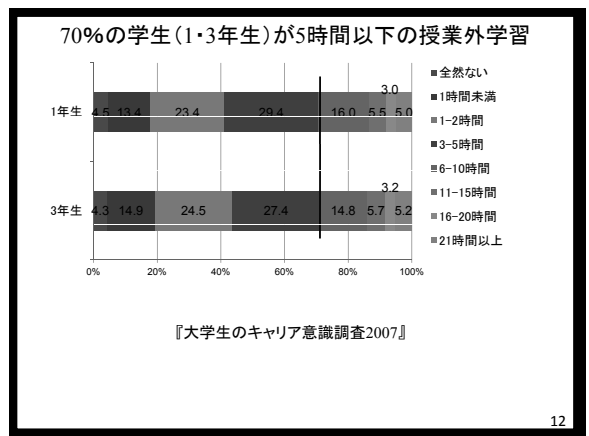
### 本日の話

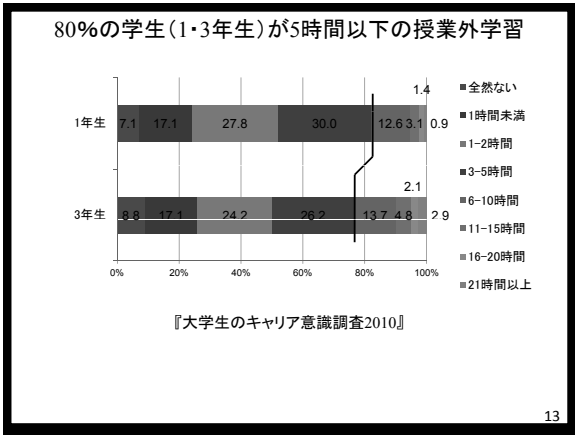
- 学生の授業・授業外学習時間の国際比較
- バランスのいい授業・授業外学習が学生の成長指標となる

### 『大学生のキャリア意識調査』

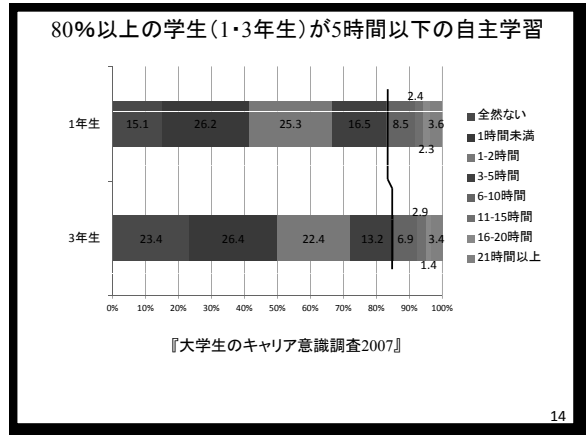
- 主催: 京都大学高等教育研究開発推進センター・(財)電通育英会
- 電通リサーチによるインターネットリサーチ。
- 回答者: 2007年調査: 全国の国公私立大学生2,013名 (1年生988人、3年生1,025人)  
2010年調査: 全国の国公私立大学生2,652名 (1年生1,328人、3年生1,324人)
- 調査時期: 2007年11月、2010年11月に実施。

京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会主催「大学生のキャリア意識調査2007」 <http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/>

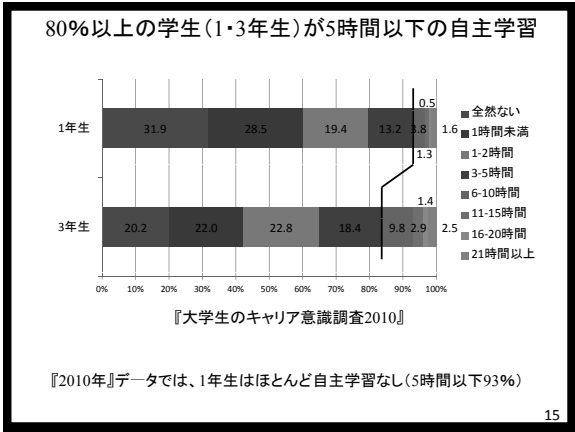




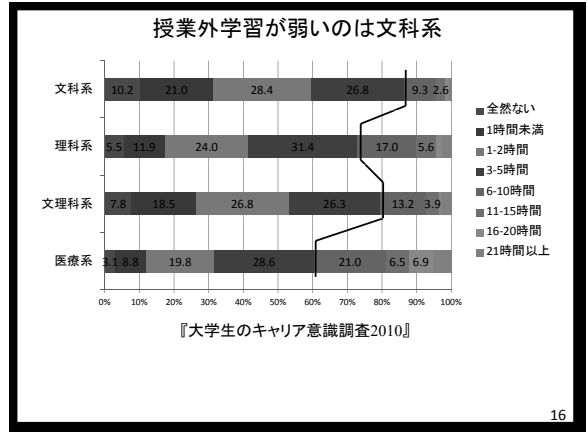
13



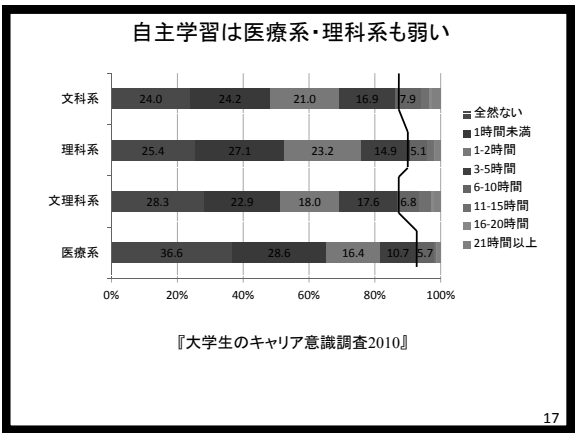
14



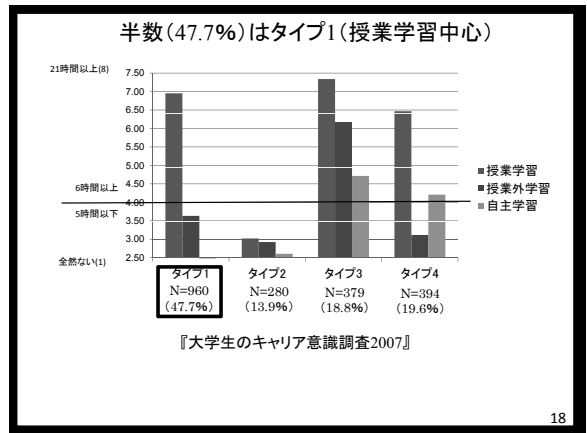
15



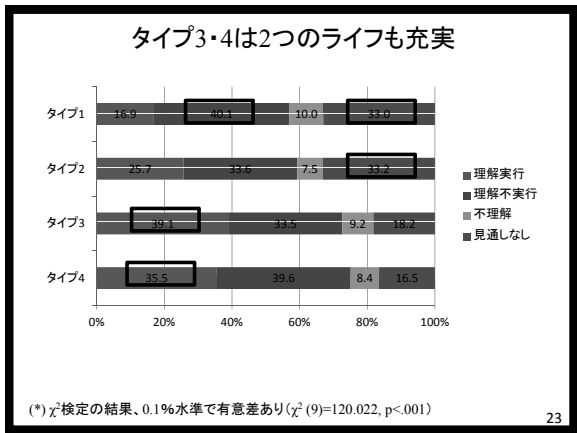
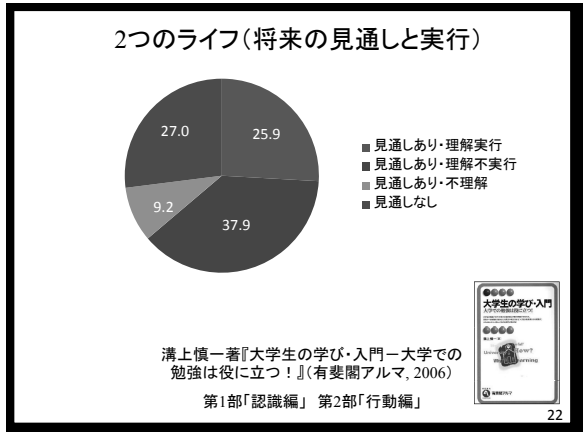
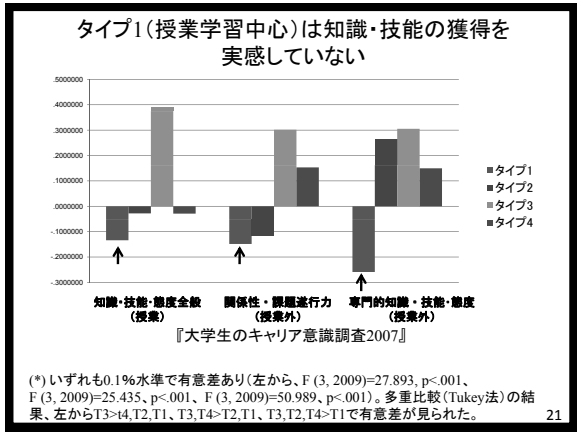
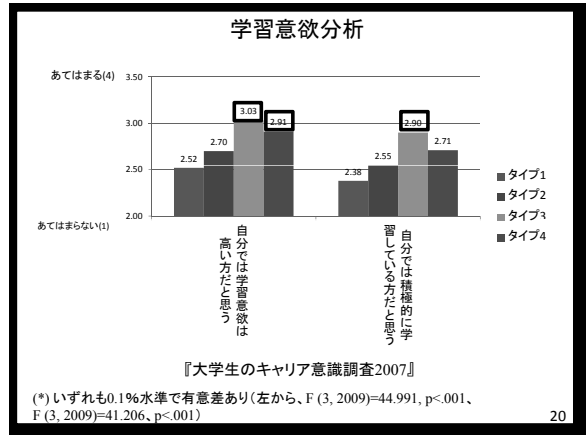
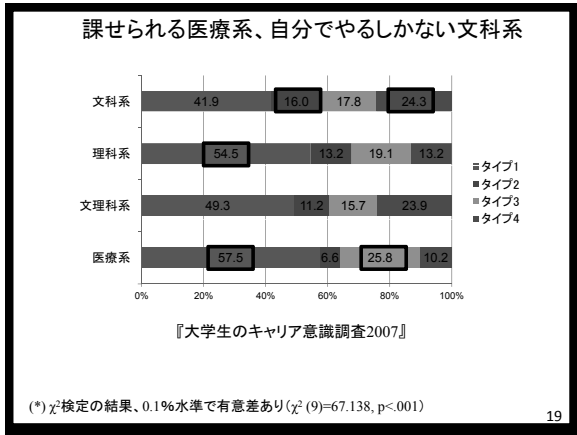
16



17



18



### まとめ

- 学生の授業・授業外学習時間の国際比較  
米国・カナダの学習状況の悪化/それに比べての日本の状況
- バランスのいい授業・授業外学習が学生の成長指標となる  
あまりにも短い授業外学習時間/タイプ1(授業学習中心の学生)は学習意欲、知識・技能の獲得、2つのライフが弱い

### 参考文献

- 溝上慎一 (2006). 大学生の学び・入門  
—大学での勉強は役に立つ!—. 有斐閣アルマ.

【関連】「2つのライフ」を学生にいかに関係とさせるかを論じた本。初年次教育テキスト。



- 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—  
適応から自己形成の時代へ—. 有斐閣選書.

【関連】青年期の現代への変貌を歴史的・社会的に概説しつつ、学習や2つのライフが、大学生にとっていかに現代的な青年期課題になっているかを説明したもの。



25

【ご案内】京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会主催  
『大学生研究フォーラム2011』(2011年8月1日)  
於: 京都大学百年時計台記念館

